



監督＝クリストファー・タボリ／出演＝クリスチャン・スレーター／ギル・ペローズ／エステラ・ウォーレン／マイケル・クラーク・ダンカン／ケビン・マクナルティー（インターフィルム配給／2004年アメリカ映画／96分）

……「ヘッドハンティング」「ヘッドハンター」という言葉は一時流行したが、不良債権の処理にもたつき、経済不況・デフレ状態に陥った日本では死語に……。しかし、本場アメリカでは……。殺人まで含めたこんなすごいヘッドハンターの姿にビックリ！ ヒルズ族を中心とする IT 業界で再度ヘッドハンティングが復活するとすれば、この映画も近未来の日本の姿として勉強しておく価値があるかも……？

昔懐かしい「ヘッドハンター」という言葉

ひと昔前、日本が経済的に豊かだった頃、日本でもヘッドハンティングとかヘッドハンターという言葉が流行していたことがあった。「企業の発展は人材にあり」と強調されたのは、その当時、日本の経済成長が著しかったため、元気で活気ある競争が十分な意味をもっていたため。かの戦国時代の武将武田信玄も「人は石垣、人は城」と歌った(?)が、ヘッドハンティングは、それとはちょっと違うイメージでの人材確保術……？

IT 業界を中心とする企業買収は……？

今年2月のライブドアとニッポン放送問題や、現在世間の注目を集めている楽天とTBS、さらには村上ファンドと阪神タイガース問題などを見ていると、現在ではヘッドハンティングより、株ごと会社ごと買い取ってしまうという話が横行(流行?)していることがよくわかる。そして、そういう時代状況に対応して、

会社の吸収、合併、買収が完成すれば、それを実行した「ファンド」からそこに適切な人材を送り込むというスタイルが定着している。

したがって日本では今でもヘッドハンティングは定着しておらず、ヘッドハンターという職業は確立されていないが、すべてがアメリカナイズされている日本では近い将来……？

陪審コンサルタントとヘッドハンター

ジョン・グリシャム原作の『陪審評決』を映画化したのが、『ニューオーリンズ・トライアル』（03年）だったが、そこに登場した、いかにもアメリカ的な職業が陪審コンサルタント！ 陪審制度をとるアメリカの法廷で、陪審員の票の取り込みを専門的にアドバイスしかつ実行するのがその仕事だ。

日本では、2009年4月以降裁判員制度がスタートするため、現在その準備作業に精を出している（？）が、仮に裁判員制度が定着した場合、日本にも陪審コンサルタントという職業が生まれるかも……？

それと同じように、日本の企業でも競争が激化して人材の確保が重大なテーマとなり、ヘッドハンティングが横行するようになれば、この映画のようなヘッドハンターという職業が定着するかも……？

不気味な冒頭シーン

この映画は冒頭、登場人物を紹介する字幕とともにスクリーン上に何とも気味の悪いモニターシーンが次々と現れ、さらに悲鳴や銃声が聞こえてくる。したがって何も予備知識をもたないで劇場内に入った私は、一瞬これはサスペンスホラーものかと思ったほど……。

テレビモニターを観ながらさまざまな細工をしているのが、ヘッドハンターのビンセント・パーマー（クリスチャン・スレーター）。そして悲鳴をあげていたのは、執拗な勧誘によってついにヘッドハントされたジョン・ブレイクリー（ケビン・マクナルティー）の妻。

ということは、ヘッドハンティングに応じなければ妻は殺されるということ……？ こりゃ、不気味なはず……。

本来、名誉なことだが……

あえてヘッドハンティングという言葉を使わなくても、たとえばプロ野球やプロゴルフの世界でも、選手の優秀さはすべてその年俸によって推し計られている。それと同じように、企業においても、経営者から営業、経理、総務あらゆる分野において優秀な社員であるかどうかすべて年俸で推し計られるのは、ある意味合理的なもの……？ 昔ながらの日本の終身雇用制は今や完全に崩壊し、自分の価値をきちんと年俸として評価してもらいたいという傾向は今後一層強まるはず。そうなれば当然、自分を誰がいくら年俸と評価してくれるかが最大の関心事となるため、高い地位と高収入を約束してヘッドハンティングを仕掛けてくれることは、本来名誉なはず。

ところが、この映画の一方の主人公であるベン・キーツ（ギル・ペローズ）は、株式上場を目指してともに苦勞してきた社長のフランクリン（マイケル・クラーク・ダンカン）や社員たちとの結びつきを大切に考え、そんな名誉あるヘッドハンティングの申し出を断ったのだが……？

そこまでやるか！ その1

この映画の主人公は、映画史上はじめてヘッドハンターという職業で登場したビンセント・パーマー。ビンセント・パーマーを演じたクリスチャン・スレーターは、当初ヘッドハントされる側の役でオファーされたが、脚本を読んでいくうちにヘッドハンターの役にホレこみ、どうしてもその役をやりたいとおネダリしたとのこと。

ヘッドハンターという職業を最初に取りあげた映画だから余計その仕事ぶり（？）を強調しているのだろうが、このクリスチャン・スレーター扮するヘッドハンターのキャラクターは並大抵ではない。というより異常……？ 不動産屋以上の口八丁手八丁ぶりは当然だが、すごいのはこれと定めた目標への集中ぶりと24時間休みなし状態（？）での徹底した仕事ぶり。「そこまでやるか！」と思うのは、第1にあの陪審コンサルタントと同じようなハイテク機器を駆使した情報集め……。と言えは聞こえはよいが、盗聴あり、監視モニターあり、そして買収

あり、と何でもありのエグイやり方！

そこまでやるか！ その2

偶然の出会いのフリをして近づいてきたうえ、たちまち親しくなるテクニックはさすがだが、それはヘッドハンティング対象の本人のみならず、必要となれば、妻や娘に対しても。そして、そこで有効なのが贈りもの攻勢。これは誰に対してもそれなりの効果があるのは当然……。[将を射んと欲すれば、まず馬を射よ]という日本のことわざはここにも活かしている……。

さらにターゲットとされた本人を勧誘するだけではなく、社長や同僚そして秘書たちに対してもさまざまな情報操作を加え、内部的に疑心暗鬼にしていくのも有効な手段。そんな中、ベンと妻や娘との関係は……？ そしてベンと社長や同僚、秘書たちとの関係は……？

そこまでやるか！ その3

この映画のチラシには、「奴の誘いは命がけ、“NO”の言葉が死の合図」という面白いキャッチコピーが謳われている。そして映画の後半は、まさにこの言葉どおりの恐ろしい展開に……。ビンセントの本当の恐さを知ったベンは、以前にビンセントからヘッドハンティングされたジョンの居所をつきとめ、一緒に警察に出頭しようと説得したが、ジョンは「彼から逃れるためには転職するか、彼を殺すしかない」と諦めきった言葉を残すのみだった……。

ヘッドハンティングに応じなければ妻や娘の身に危険が及ぶことを公然とベンに対して述べるビンセントは、今やヘッドハンターとしての名声と報酬のためなら何でもする殺人鬼の顔を見せしてきたのだった……。

クライマックスに向けて一気に……

ベンがその頭脳を「買われた」のは、「人間に投与したある成分部質が血液中でプラズマコードに変質し、そのコードを解析してその人物の居場所を人工衛星を使って15分以内に特定できる、究極の追跡システムを完成」したという功績によるもの。これによって経営危機に陥っていた零細企業のビズトラックス社には

銀行の融資も広がり、株式上場が目前に迫っていたところ。そんな状態でベンをヘッドハンティングされたら大変なことは当たり前。そこで社長のフランクリンは大いに悩むことになったが、社長の恩義を感じていた古いタイプ(?)のベンは退社のうわさをきっぱりと否定し、フランクリンの目の前で相手社に対して断りの電話を入れるという「誠意」を見せた。しかし、そんなベンのあくまでヘッドハント拒否の姿勢にイラだち、キレかかったビンセントは、遂に狂暴なキバを剥いてきた。映画はここから一気にクライマックスへ……。

万策尽きたベンはついにビンセントの「説得」に屈してしまうのだろうか、それとも、あくまでヘッドハンティングを拒否することができるのだろうか……？

場末の映画館での、観客わずか10数名の中で上映されたB級映画(?)ながら、結構楽しめ、かつ考えさせられた映画だったが……。

2005(平成17)年11月7日記

ミニコラム

住管、RCCそして産業再生機構で果たした弁護士の役割は？

株価が1万7000円を突破し、「格差問題」の批判はあるものの、さまざまな経済指標がバブル期を上回る状況にまで「回復」した今、ヘタをすると、バカな日本人はまた浮かれてしまう危険性がある。

金利ゼロ政策を解除した今、長期金利の上昇傾向を受けてすでに住宅ローンの金利値上げが始まっている。そんな中で思いおこすべきは、不良債権の泥沼に入り込み、金融不安が現実化していたあの1997年に発足した住宅金融債権管理機構(住管)の役割だ。住管は一言でいえば不良債権取り立てのた

めの国営会社だが、そこに結集した弁護士たちの努力は特筆モノ。「武器商人」や「賞金稼ぎ」そして「ヘッドハンター」という職業も立派(?)だが、住管—RCC—産業再生機構という流れの中で働き、日本国再生の一翼をになった弁護士たちに光をあてた映画を是非つくってもらいたいもの。

そしてプロデューサーや監督がその勉強をするためには、私の『実況中継』シリーズを読んでもらうのが一番だと思うのだが……。

2006(平成18)年4月15日記